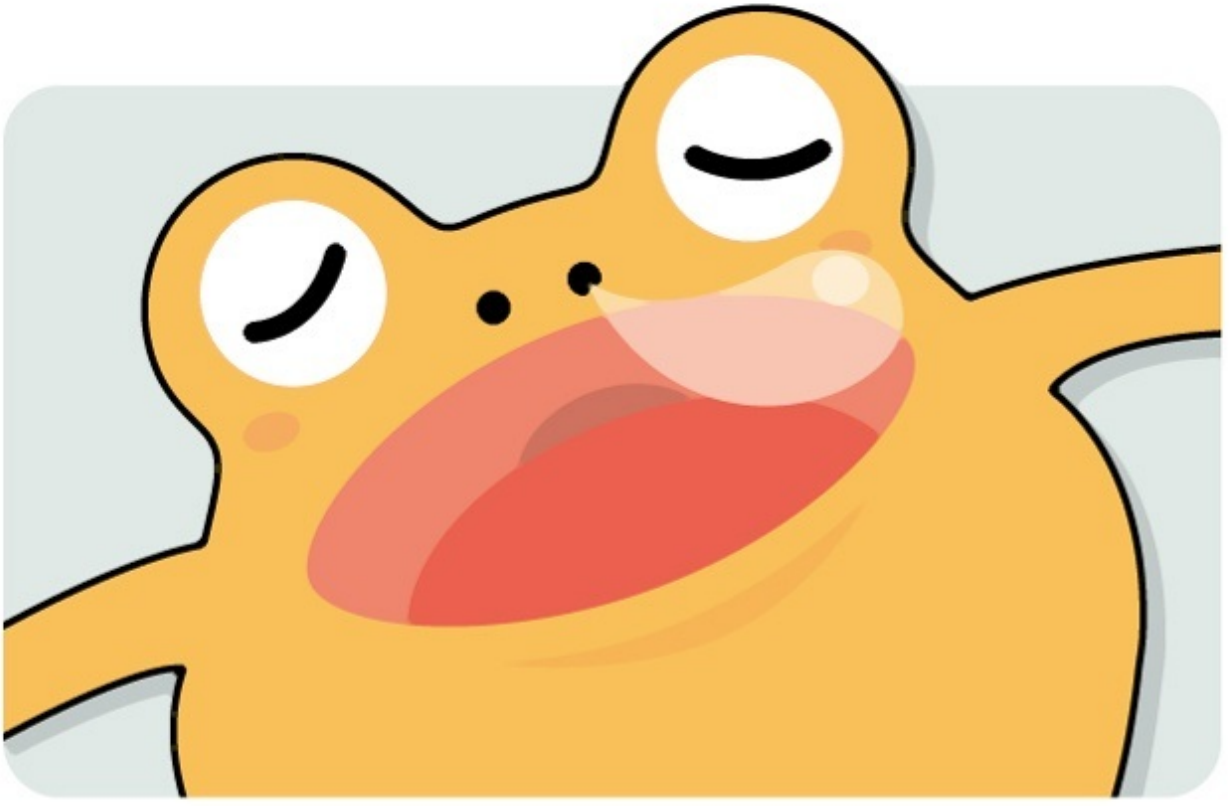
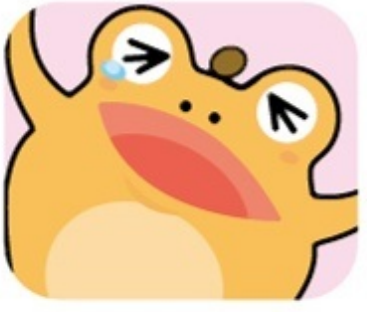
カエルさんと
芽さんのお話

作：おのうえてつや

第一話　芽との出会い



ケロケロ森の奥深くに一匹のカエルさんが住んでいました。
カエルさんはとっても寝るのが大好きで、いつもいつも寝てばかり。
今日もカエルさんはいつものようにうたた寝をしています。
おや?どこからともなく何かがふわりふわりと落ちてきます。
それはふわりふわりと、うたた寝をしているカエルさんめがけて落ちてきているようです。あれは一体なんでしょう…。
よく見るとそれは何かの種のようです。
風にふかれてやってきたのでしょうか。
その種は、風に揺られながらふわりふわりと
カエルさんの頭の上に落ちました。



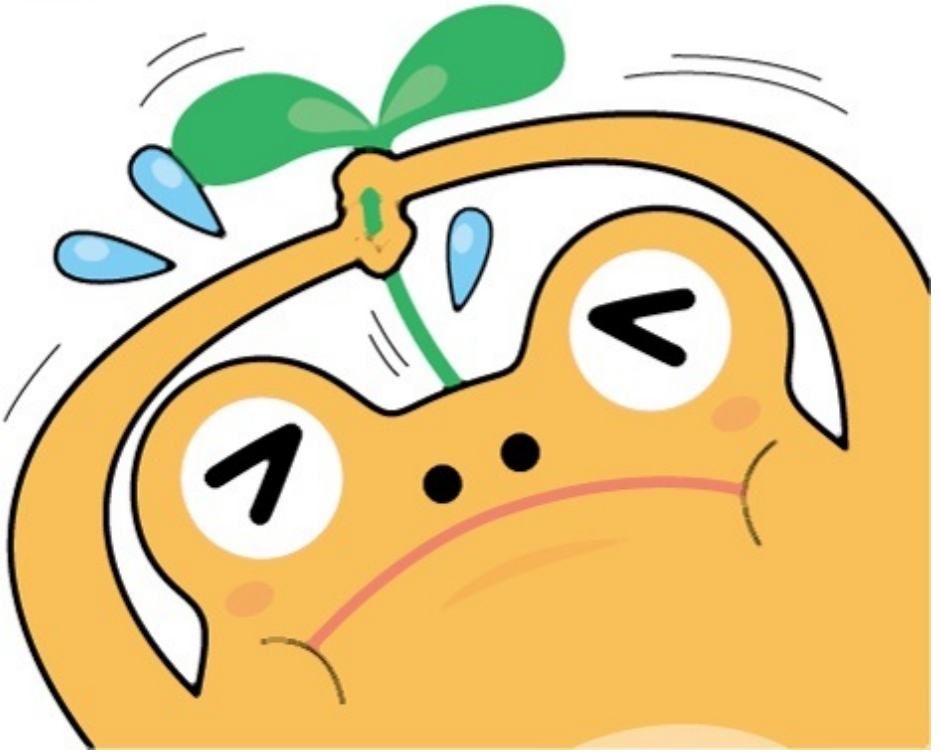
少ししてカエルさんが目を覚ましました。
しかし、カエルさんは頭の上に落ちてきた種にはまったく気が付いていないようです。
カエルさんは「ふぁ〜あ」と大きなあくびをし、また深い眠りにつきました。
そして翌朝、目を覚ましたカエルさんは水たまりにうつる自分の顔を見てびっくりしました。

なんと頭の上に何かの種がちょこんと乗っているではありませんか。
カエルさんはその種を必死に取ろうとしましたが、その種はなかなかとれません。
寝ぼすけでめんどくさがり屋のカエルさんは「まあいいや」とつぶやくと
種が頭に乗ったまま、そのまま横になると、またまた眠ってしまいました。

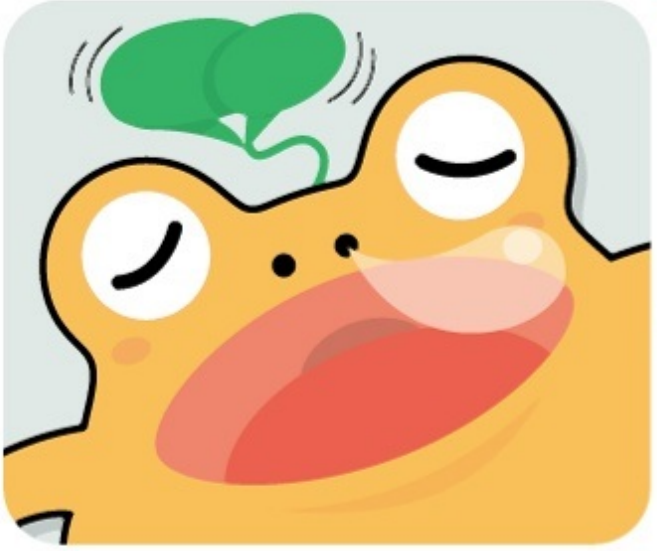
眠ってからすぐに雲行きが怪しくなり、雨がポツポツと降り出してきました。
カエルさんは雨なんか全然平気なので、まったく起きる気配がありません。
ザァーッ!!雨は半日降り続きました。

お昼頃雨はやみました。
雨がやんだころ、目を覚ましたカエルさんはまたまたびっくり!!
水たまりに映る自分の頭の上に乗っていた種から
「にょきにょきにょき」と芽が出ているではありませんか!
カエルさんは必死に芽を引っこ抜こうとしましたが、
芽はしっかり頭にくっついていて全然抜けません。
カエルさんは腕を組み一時の間考えた後、「まあいいや」と一言つぶやきました。

これが、とっても脳天気なカエルさんと
芽さんとの出会いでありました。



第二話　ともだち



「ぐがごがぁ～っ」

カエルさんは今日も大きないびきをかきながら、お昼寝をしています。
すると、どこから聴こえてくるのでしょう。

「ふぁささささ…ふぁささささ」

耳をすませば何やら小さな物音が聴こえてきます。
この音はいったいなんでしょう…。

それは先日カエルさんの頭に生えた芽さんが、
カエルさんの大きな大きないびきに揺られる音でした。
かわいそうに。芽さんは葉っぱを閉じて必死にいびきを我慢しています。
お昼の3時になったころ、カエルさんのお腹がグゥ～ッと鳴りました。
腹時計に気づいたカエルさんは目をパチクリと開けてのそっと起き上がりました。
すると突然「おやつだおやつ♪」と言いながら、森の奥へと入っていきました。
森の中にはいろんな食べ物があります。木の実や、きのこ、果物などがたくさん実っています。
たくさんの実りの中でも、カエルさんの大好物はりんごです。
カエルさんはそそくさとりんごの木の前に立つと、
「す～っは～っ」と大きな深呼吸をしました。
次の瞬間「ふんが～っっ!」という気合いの入った声とともに
りんごの木におもいっきり張り手をぶつけました。
バッチ～ンッッ……!!!ものすごい音が森全体に響き渡りました。

すると、ドサドサドサッ!
りんごの木から山のようにりんごが落ちてきました。カエルさんは日頃はぐーたらしていますが、食べ物の事になるともの凄い力を発揮するようです。

カエルさんは早速落ちてきたりんごをムッシャムシャと食べはじめました。
ムシャムシャムシャムシャ……。
カエルさんがひたすらりんごに舌鼓をうっていると、
あれれ?いつの間にかあの山のようにあったりんごが、
あっという間に残り1個になっていました。
カエルさんはふぅ～っと一息ついた後、満足気に
「食べた食べた」とつぶやきました。
満腹満腹とお腹をさすりながら、カエルさんは残り1個になったりんごをどうしようかと、じ～っと考え出しました。
お腹一杯でもう食べれないし、そのまま置いて帰るのももったいないし…。
カエルさんがそうこう考えていると
頭の上の芽がちょんちょんと、カエルさんの頭をつつきました。
ビクッ!!!!
カエルさんはびっくりして飛び上がり、ドスンっと地面にしりもちをつきました。
カエルさんは頭に芽が生えていた事をすっかり忘れていた様です。
「あっ。そうか～。昨日頭に芽が生えたんだっけか～…。びっくりしたな～。」
カエルさんはそう言うと、頭の芽に話しかけました。
「芽さん。ちょんちょんと頭をつついてきたけどもしかしてりんごが食べたいの?」
そう訪ねると、芽さんはコクッとうなずきました。
カエルさんは頭の中でこう考えました。
(りんごはおいしいけれど、芽さんはどうやって食べるのかなぁ?…。
口だってないし、りんごは食べれないんじゃないのかなぁ?)
腕組をし、一時の間考えていましたが、やっぱり考え事はめんどくさいらしく、
「まあ、いいや」とつぶやき、芽さんにりんごをホイと渡しました。
芽さんは嬉しそうに、大事そうに、りんごをギュッと握りしめました。
そしてお礼を言っているかのように芽さんはコクッコクッと頭を下げました。
すると、カエルさんはなんだか嬉しくなりました。
いままでずっとひとりぼっちだったので、

芽さんとのふれあいがとても新鮮であたたかく感じたのです。
カエルさんは恥ずかしそうに顔を真っ赤にしてこい言いました。
「おいらはずっとずっとひとりぼっちで、ずっとず～っとともだちが欲しいなって思ってたんだ。どうかおいらのともだちになってくれないかい？」
カエルさんは勇気を出してこう言うと、芽さんはコクッコクッコクッと嬉しそうに何度も何度もうなずきました。
「やったーっ！」
カエルさんはそう叫ぶと、はじめてのともだちがとても嬉しくて
空高くピョ～ンッと飛び跳ねました。

……こうしてカエルさんと芽さんはずっと
仲の良いともだちになったのでした。

第三話　あたたかい気持ち

カエルさんと芽さんがともだちになってから1週間が経っていました。
芽さんもあれから成長したようで、葉っぱもずいぶん大きくなっていました。
今日は二人で散歩をしているようです。
寝ぼすけでめんどくさがりなカエルさんは芽さんというともだちができてとっても変わったようです。
二人で散歩に出かけるのが毎日の日課になっていました。
「カエルの歌が聴こえてくるよ～♪ケロッケロッケロッ」
カエルさんは上機嫌で歌を歌っています。

するとそこへ、森の湖に住んでいるアマガエルがやってきました。
「ねぇねぇ君。頭にへんてこな草っぱが乗ってるけどそれは一体なんだい?」
アマガエルは訪ねました。
カエルさんは嬉しそうに、そして自慢げにこう言いました。
「へんてこな葉っぱなんかじゃないよ。この芽は僕の大事なともだちなんだよ。」

カエルさんがそう言うと、アマガエルはクスクスクスと笑い出しました。
「葉っぱがともだちだって?葉っぱなんてそこら中にたくさん生えてるじゃないか。
そこいらの葉っぱと一緒でしょ?それをともだちだなんて…クスクスクス。」
アマガエルはそう言うとそのまま去っていきました。
カエルさんはアマガエルの言ったことがとても悔しくて、
いまにも泣き出しそうになりました。
すると芽さんが、ちょんちょんとカエルさんの頭をつつきました。
芽さんはいまにも泣き出しそうなカエルさんを励まそうと、
葉っぱを横にふったり縦にふったりと元気にふるまいました。

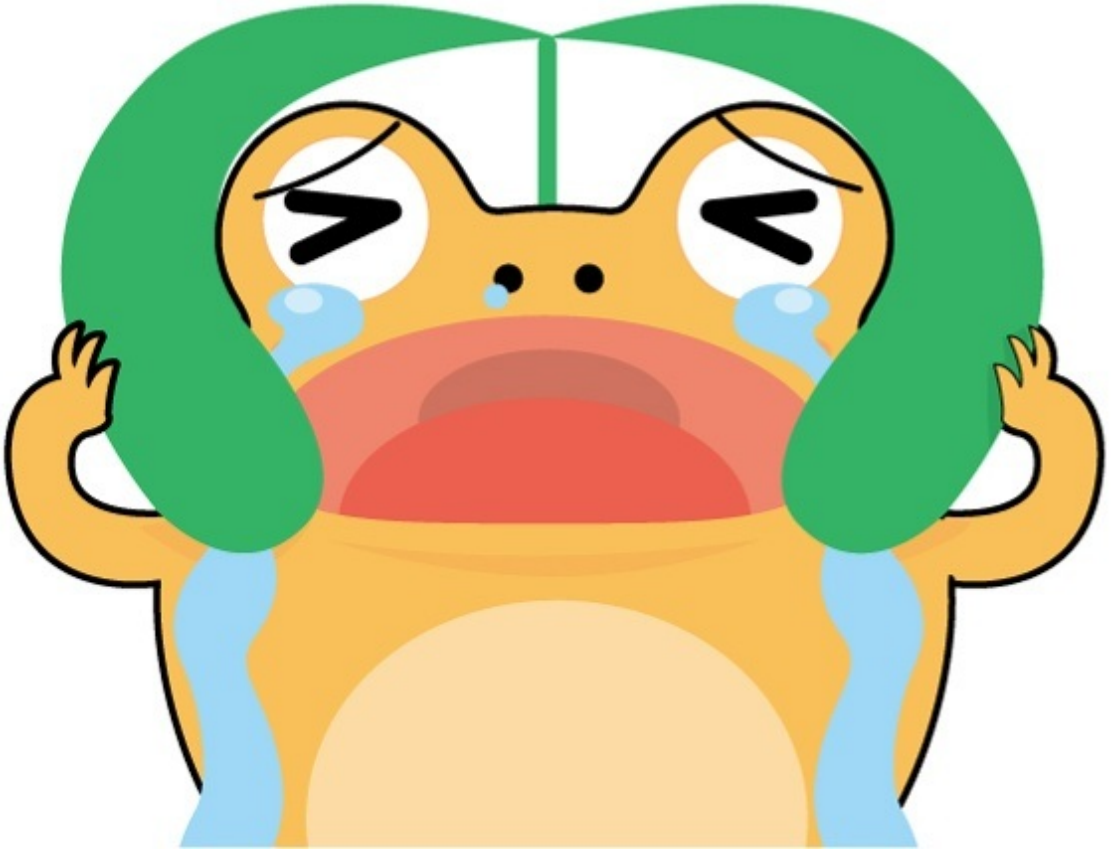
カエルさんは涙をこらえて芽さんに言いました。

「芽さんごめんなさい。あんなひどいことを言われて一番傷ついたのは君なのに。なんだか僕だけが悲しいみたいで。ごめんなさい。本当にごめんなさい……。」

すると芽さんは、そっと大きな葉っぱでカエルさんを抱きしめました。
カエルさんは芽さんのあたたかい気持ちに胸がいっぱいになり
こらえていた涙がグッとこみあげてきました。
そして、カエルさんは芽さんの葉っぱの中でおもいっきり泣きました。

「芽さん。あんなことを言われたって、僕達はずっとともだちだからね…。
ずっとずっと一緒に生きていこうね。」

カエルさんは泣きながら芽さんの葉っぱをギュッとにぎりしめていました…。



第四話　お願いごと

澄み切った夜空に燦々と無数の星々が輝いています。
カエルさんと芽さんはそのきれいな星空にたそがれているようです。

「きれいだなぁ～。おいらこんなにきれいな星空を見たのははじめてだよ。」
カエルさんは目を輝かせて言いました。
芽さんもキラキラ輝くその星々にみとれている様子です。
星空にみとれているカエルさんと芽さんのところへ夜行性の両生類、サンショウウオじいさんがやってきました。

「ふぉっふぉっふぉっ。そこの頭に芽が生えたカエルの坊や。そんなところで何をしているのかい?」
サンショウウオじいさんがそう訪ねてきました。
カエルさんは答えました。
「あのね。おいらと芽さんはこのきれいに輝く星たちを見てるんだよ。と～ってもきれいだからずっと見てても飽きないんだ。」
「ふぉっふぉっふぉっ。そうかいそうかい。
今日の星々はいつにもまして一段ときれいじゃからの～。
わしも子供の頃は君たちのようによく星空にみとれておったもんじゃよ。」
サンショウウオじいさんは立派にのびたあごヒゲをさわりながら言いました。
「…ところで坊や。流れ星というものを知っとるかい?」
「流れ星?」カエルさんと芽さんは首をかしげました。
「流れ星って何?」カエルさんが訪ねるとサンショウウオじいさんは言いました。

「流れ星とはの～、この夜空に輝く星々が力つきて儚く散っていく様子を流れ星というんじゃよ。
なんでもその流れ星に3回願いごとをするとその願いごとが叶うと言われているんじゃ。」
「へぇ～。願いごとが叶うなんてすごいなぁ～。」

カエルさんはとても興味深々な様子です。
その時。……キラッ!!
澄み切った夜空に一瞬なにかが光りました。
カエルさんと芽さんは驚いて夜空を見上げるとそこにはなんと無数の流れ星が流れていました。
とても幻想的な風景です。

「わぁ～!すご～い!!きれいだな～。」
カエルさんと芽さんはそのきれいな流れ星に目を輝かせました。
「あれが流れ星じゃよ。いつ見てもきれいじゃの～。しかし、こんなにも無数に流れる流れ星はめずらしいぞい。ふぉっふぉっふぉっふぉっ。」
サンショウウオじいさんは愉快に笑いました。
「あれが流れ星って言うのか～。とってもきれいだね。」
カエルさんが嬉しそうにそう言うと、芽さんも嬉しそうにうなずきました。
「さあ。さっそくお願いごとをしようよ!」

カエルさんと芽さんは手をあわせて流れる星々にこうお願いごとをしました。

カエルさんは
『芽さんとず～っとずっとともだちでいられますように。』
芽さんは
『カエルさんと少しでも長く一緒に過ごせますように…。』
と、それぞれ願いを込めて流れ星にお願いごとをしました。
お願いごとをした後、カエルさんと芽さんは顔を見合わせ

とても満足そうに嬉しそうにニッコリしました。

「ふぉっふぉっ。よかったのぉ～坊やたち。」

サンショウウオじいさんはカエルさんと芽さんの頭を撫でると

やさしく微笑みながら帰っていきました…。

おじいさんが帰ってからもふたりはずっと星空を眺めていました。

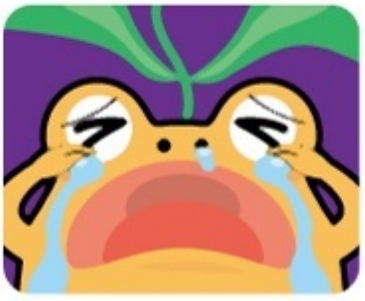
そして、ふたりともいつの間にかそのままスヤスヤと眠っていました。

きれいに輝く星空の下、カエルさんと芽さん。とってもいい寝顔です。

今夜はいい夢が見れそうですね…。

第五話　つぼみ

ある日の真夜中。
今夜はとても蒸し暑い夜。
カエルさんはふと目を覚ましてしまいました。
カエルさんが目を覚ますと、芽さんの様子がなんだか変でした。
とても苦しそうに体をくねくねとよじらせています。
カエルさんはあわてて飛び起きました。



「芽さん!!どうしたの!?」
芽さんは苦しそうにしています。
カエルさんは大声で助けをもとめました。
「誰か〜っ!誰か助けて〜っ!!」
……しかしこんな真夜中。誰も助けにきてくれるはずもありません。カエルさんはもうどうしていいかわからずにわぁ〜んわぁ〜んと泣き出しました。
「わぁ〜ん!わぁ〜ん!芽さん死なないで!!誰か芽さんを助けてください!」
すると、ちょんちょんちょん。
芽さんがカエルさんの頭をつつきました。
カエルさんは涙を拭い芽さんを見上げました。
「……えっ?」
カエルさんはとても驚きました。なぜなら、芽さんにつぼみが出ていたからです。
「芽さんの頭につぼみが出てる!!」
カエルさんはびっくりしたと同時に喜びがこみ上げてきました。
「すご〜い!芽さんにつぼみが出たぞ!つぼみが出たぞ〜!!」
カエルさんは悲しみから一転、嬉しくてピョンピョンと飛び跳ねて喜びました。

そして、カエルさんは言いました。
「でもでもおいらとっても心配したんだよ。芽さんが死んじゃうかと思ってとても怖かったんだよ。とても悲しかったんだよ…。」

芽さんはコクッと頭を下げてカエルさんに謝りました。

「でも、今日あらためて芽さんの大切さがわかったよ。
芽さんはおいらにとってとてもとても大きな存在なんだなって!
それと芽さん、
つぼみが出てよかったね♪
心からおめでとう…。」
カエルさんは顔を赤らめながら言いました。

芽さんはカエルさんの『おめでとう』の言葉がとてもとても嬉しくて葉っぱを大きく広げて喜びました。
そして『これからもよろしく』と芽さんもカエルさんにペコリと頭を下げました。

嬉しいある日の蒸し暑い夜のこと…。
カエルさんと芽さんの喜ぶ声が
いつまでもいつまでもきれいな夜空に
響き渡っていました…。

第六話　お花見

今日はぽかぽかとしたあたたかな小春日和。カエルさんと芽さんのところにも春が訪れたようです。

「芽さんおはよう。今日はなんだかぽかぽかしてて気持ちがいいね♪」

カエルさんは春の訪れがとても気持ちがいい様子です。

あまりに外が気持ちがよさそうなのでカエルさんは芽さんと花見に行くことを思いつきました。

「ねぇねぇ芽さん。今日はとっても天気がいいので一緒に花見に行こうよ。」

カエルさんはうきうきした様子で芽さんに言いました。

芽さんは嬉しそうにコクッコクッとうなずきました。

「やった～。じゃあ早速準備しなくちゃ。」

大好きなりんごと少しのお菓子、芽さんの栄養水を持って準備は整いました。「よぉ～し!さっそく出かけよ～!」

カエルさんと芽さんはうきうきした気持ちで外へと出かけました。「ルンルンルン♪」鼻歌を歌いながらてくてくと進み、やがて大きな桜の木のある草原へとたどり着きました。

「着いた～♪」

カエルさんと芽さんがたどり着いた桜の木にはたくさんの桜の花が咲き誇っていました。

「うわ～っ!!とってもきれいだね～!!すごいや!」カエルさんと芽さんはそのきれいに咲き誇る桜の花々にとても驚き感動しました。桜そして、桜の木の下にちょこんと座るとピクニックシートを広げりんごとお菓子と栄養水を並べさっそく食べ始めました。

「おいし～♪やっぱりお外で食べるりんごは
とってもおいしいなぁ～。」
芽さんも栄養水で栄養をとり、おいしそうに葉っぱを広げてのびのびしました。
「ねぇねぇ芽さん。芽さんもこの桜の木のようにきれいな花を咲かせるんでしょ♪」カエルさんがそう訪ねると芽さんは首をかしげてわからない様子です。
カエルさんは言いました。
「でもでもおいら、芽さんはこの桜の花よりもぜったいぜ～～ったいきれいな花を咲かせると思うよ。だってだって芽さんはとても優しくて素敵だからぜったいきれいな花を咲かせるんだよ。」
カエルさんの言葉に芽さんはとても恥ずかしそうにクネクネとしました。
二人がおしゃべりをしていると、ひゅ～と心地よいそよ風が吹きました。
「わ～。とっても気持ちのいい風だね。気持ちいいな～♪」
芽さんもそよ風に揺られ、とっても気持ちがよさそうです。
「……今日はなんだか平和だね。時間が止まったような素敵な日だね♪」
「そうだ!芽さん♪これからも二人でいろんなところに出かけようよ!そして一緒にたくさんの思い出をいっぱいい～～っぱい作ろうよ!ねっ?約束だよ♪」と声を弾ませながら嬉しそうにそう言いました。
芽さんも嬉しそうにコクッコクッコクッとうなずきました。

「あっそうだ。ゆびきりしようよ!」カエルさんは思いついたかのようにそう言うと芽さんとゆびきりの約束をしました。
「ゆびきりげんまんウソついたらはりせんぼんの～ます♪ゆびきった」
ぽかぽかした気持ちのいい春。
ゆっくりと流れる時間の中で二人は日が暮れるまでお花見を楽しんでいました。

第七話　開花

静かに静まり返った夜。
芽さんはとうとう開花の時期を迎えたようです。
ゆっくりと静かに花びらを開かせています。
開花間近1枚2枚と花びらを開かせ、開花したのは
もう夜があけようとする朝がたの事でした。

カエルさんは何も知らずにいつものように目を覚ましました。
「芽さん。おはよ～う
……わわわっ!!!」
ドスン!
カエルさんは芽さんの開花にびっくりしてベッドから落っこちてしまいました。
「芽さん!!花が咲いてる!花がさいてるよ!!」芽さんはコクッとうなずきました。
開花芽さんの咲かせた花は真っ白でとてもとても綺麗に輝いていました。
「すごいやすごいや!とうとう芽さんに花が咲いたんだね♪やっぱりおいらの言った通りとても綺麗で素敵な花だよ!」
カエルさんは嬉しくて芽さんの開花を心から喜びました。
しかし、グスン…。
カエルさんはなにやら泣き出したようです。
「あれれ。なんだかおいら涙が出てきちゃった。」
芽さんはカエルさんが泣き出したので、あわててしまいました。
「芽さん。心配しないで。おいら悲しくて泣い

てるんじゃないんだよ。芽さんの開花が嬉しくて自然と涙が込み上げてきたんだよ。」

カエルさんは涙をぬぐいながら芽さんに「おめでとう」と心から祝福しました。

芽さんもありがとうと、頭をペコリと下げました。

「そうだ!お祝いしなくちゃね。」

カエルさんはそう言うと、近くに住んでいる生き物たちに今夜パーティーを開くことをつたえにいきました。

亀おじさんやサンショウウオじいさん。そしてアマガエルやかたつむりさんのところなどに「今夜、芽さんの開花パーティーを開くのでぜひ来て下さい。」と書いた招待状をポストに配ってまわりました。

家に帰るとさっそくパーティーの準備をしました。

そして、夜を迎え、招待した生き物たちが芽さんとカエルさんのところへ次々とやってきました。

「ふぉっふぉっふぉっ。きれいに咲いたもんじゃのぉ〜。」

サンショウウオじいさんがいつものように愉快に笑いながらやってきました。

次に、亀おじさんがやってきて「すばらしいじゃないか!こんなに綺麗な花を見るのはうまれてはじめてだよ。」と大きな声で言いました。

そして以前カエルさんにひどいことを言ったアマガエルもやってきました。

「カエルさん。この前はひどいこと言ってごめんなさい。」

アマガエルは泣きながらカエルさんにあやまりました。

「ううん。いいんだよ。今日は来てくれて本当にありがとう。

さあ、はいってはいって♪」

カエルさんはアマガエルを許し、あたたかく迎え入れました。

そしてその後もたくさんの生き物たちが集まり芽さんの開花をいっせいに祝福しました。

「芽さん、開花おめでと～う!!」
芽さんはとてもとても嬉しくて、ありがとうありがとうとみんなに何度も何度も頭を下げました。
そこで、カエルさんは思いついたかのようにこう言いました。
「そうだ!今日は芽さんの開花した素敵な記念日だから、
開花の日としてこれからも毎年みんなで祝っていこうよ♪」
カエルさんの提案にサンショウウオじいさんが言いました。
「うんうん。いい案じゃぞい。しかし毎年とは言っても花が散…」
「じいさん!」サンショウウオじいさんは何かを口にしそうになりしましたが
亀おじさんに止められたようです。
「すまぬすまぬ。…そうじゃのぉ。毎年みんなで開花の日と称して
芽さんを祝っていこうじゃないか。ふぉっふぉっふぉっ。」
「賛成賛成!」
「それじゃ。今日3月19日は開花の日として毎年みんなで芽さんを祝うからね♪
よかったね。芽さん♪」
カエルさんは満面の笑顔で芽さんに言いました。
芽さんもやさしく花を揺らして喜びました。

今日は開花の日。
芽さんの開花を祝うパーティーは夜遅くまで賑やかに続いていました。

第八話　スケッチ

ふたりは今日もおでかけのようです。
カエルさんは上機嫌でスキップしながら
どこかへ向かっているようです。
「ルンルンルン♪今日もいい天気だなぁ～。」
よく見るとカエルさんはなにやら大きな
カバンを持っています。
「ねぇねぇ芽さん。やっぱり芽さんの花は
いつみても綺麗だね♪」
カエルさんがそう言うと、芽さんはいつも
のように恥ずかしそうにクネクネしました。

そんなこんなでおしゃべりをしているうちに澄みきった湖へとたどり着きました。
「ここでいいかな。」
カエルさんはよいしょっとカバンを置き、そして湖のほとりにちょこんと座りました。
そして、カバンの中からスケッチブックと鉛筆を取り出すと芽さんにこう言いました。
「今日は絵を描きにきたんだよ♪ここだったらきれいな絵が描けそうだから。」
芽さんはコクッとうなずきました。
「芽さん。絵が完成するまで見ちゃ駄目だよ。おいら絵はへたっぴだから恥ずかしいんだ。」

カエルさんはそう言うと澄みきった湖の
ほとりを眺め絵を描きはじめました。
芽さんは見ないように葉っぱで目をふさ
いでいました。

カキカキカキ……。

カエルさんが絵を描きだしてから少しの時間がたちました……。
「できたぁ～!!」カエルさんの絵が完成したようです。
カエルさんは満足げにそして少し恥ずかしそうに芽さんにその絵を見せました。

「芽さん。見て見て。きれいでしょ?」

芽さんはカエルさんの絵を見てびっくり仰天!そのキャンバスには澄みきった綺麗な湖が描かれているかと思いきやカエルさんが描いていたのはなんと芽さんの絵だったのです。

「芽さん。どう?へたっぴでしょ?」

カエルさんがそう言うと芽さんは首を横に振り、上手だよと言っているかのように嬉しそうに葉っぱを広げて喜びました。

「なんだか芽さんのきれいな花を見てたら芽さんを描きたくなったんだ♪」

カエルさんは恥ずかしそうにそう言いました。芽さんはカエルさんの絵がとても嬉しくて何度も何度も絵を眺めていました。

「そうだ!!この絵は家に帰ったら飾っておこうよ!」

湖のほとりで食事をすますとふたりは家へと帰りました。家へ帰ると、さっそくその絵をベッドのそばに飾りました。

「う〜ん。やっぱり芽さんの花とは似ても似つかないや。芽さんごめんね。」

カエルさんはあまり自分の描いた絵に満足してませんでしたが、芽さんはとても満足そうに長い間その絵を眺めていました。

第九話　綿ぼうし

それは明朝のこと。カエルさんがなにやら泣きながら大慌ての様子です。
どうしたのでしょうか…。

「芽さんの花がなくなってるよ!芽さんの花が病気になっちゃった〜。わぁ〜ん!」

カエルさんが慌てていたのは芽さんの花が綿ぼうしへと変わっていたからです。
花が綿ぼうしへと変わるのは植物の自然の摂理ですが、カエルさんはそのことを知らず芽さんの花に何が起こっているのか分からずにいたのです。

「大変だ!早く病院へ行かなきゃ!!早く病気を治さなきゃ!」

カエルさんは気が動転し、芽さんを早く病院へ連れて行こうと必死になっていました。
ですが、芽さんはカエルさんの肩をチョンチョンとたたくと「大丈夫だよ心配しないで」といっているかのようにカエルさんが病院へ連れていこうとするのを止めました。

「どうして?早く病院へ行かなきゃ芽さんの病気は治らないんだよ。」

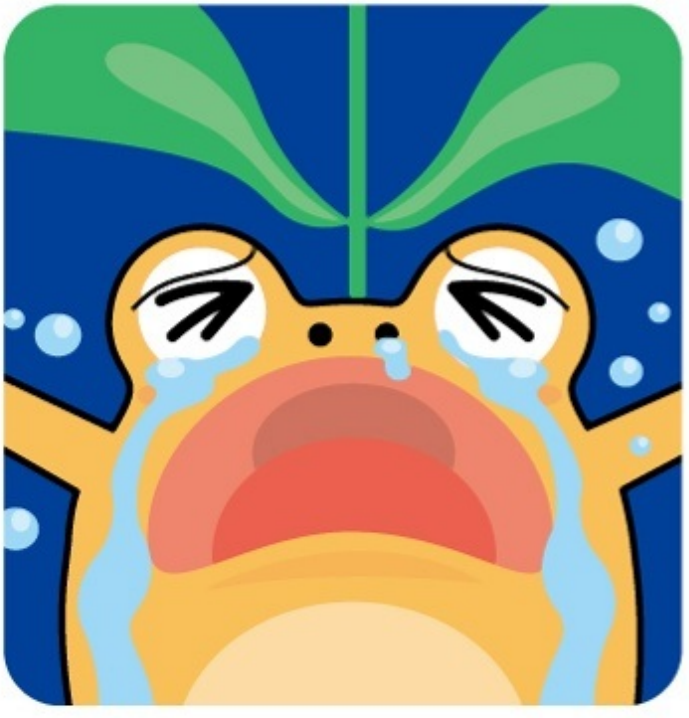
カエルさんは不安で不安で仕方ありません。

不安で不安で仕方のないカエルさんは強い口調で芽さんにこう言いました。

「おいら芽さんになにかあったら生きて
いけないよ!!
ぜったい病院へ連れて行くんだ!!」
カエルさんは芽さんが止めるのを振り切り強引に病院へと向かおうと外に飛び出しました。

その時です。それは一瞬の事でした。
カエルさんが外に出たとたん強い突風がビュビュ～ッと吹き荒れ、その突風により芽さんの綿ぼうしが全て飛ばされてしまったのです。
「芽さん?」突然の事でカエルさんは頭が真っ白になりました。
「芽さぁ～～～んっ!!!」
カエルさんは急いで急いで一刻も早く病院へと急ぎました。

病院へ着き先生が現れるとカエルさんは先生にお願いをしました。
「先生!芽さんを助けてください!おいらなんでもするから。芽さんのかわりに死んだっていい!だから…だから芽さんを助けてください!!芽さんになにかあったらおいらおいら……」



先生は「落ち着いて。さあ中へ入って…」と冷静にカエルさんと芽さんを病院の中へと通しました。
そして一時の時間が経ち、カエルさんと芽さんが病院から出てきました……。
どうやら芽さんは無事だったようです。

「芽さん本当に無事で本当によかったね。おいら安心したよ。花はなくなっちゃったけどまたすぐに花は咲くよ♪元気だして。ねっ?」
カエルさんは芽さんを励まし、心から芽さんの無事を喜びました。
芽さんは『ありがとう』とカエルさんにペコリと頭を下げました。
ですが芽さんはあまり元気がない様子です。

……そうです。芽さんはわかっているのです。
無くなった花はもう咲くことはないと…。
そして植物は種子を飛ばし子孫を残すと死んでしまうのだと。
そしてその事をカエルさんはまだ知りません。
植物の命は儚く短いのです……。

第十話　別れ

芽さんは花がなくなってから、日に日に枯れていきました。
カエルさんはそんな芽さんを心配し、芽さんを元気づけようと特製の栄養水を作って芽さんに与えたり、芽さんと出会ってからの楽しかったこと嬉しかったことを話してきかせたり、芽さんを一生懸命励ましました。
ですが、芽さんは元気を取り戻すことはありませんでした。

そして、ある夜カエルさんは夢を見ました。芽さんと二人で広々とした草原の上でひなたぼっこをしている夢です。
その夢の中で芽さんはカエルさんにこう言いました。
『カエルさん。いままで本当にありがとう。とてもとても楽しかったよ。カエルさんと出会えて本当に幸せだった…。別れるのはさびしいけど、きっとまたカエルさんに会える日がくると信じているよ。カエルさん…いままで本当に本当に心からありがとう。わたしはずっとず～っとカエルさんのこと忘れないよ。だからカエルさんもわたしのことを忘れないでね……。』
芽さんは夢の中でそう言うと一粒の涙を流し芽さんの前から姿を消しました……。

その夢に驚いたカエルさんは慌てて飛び起きました。
「芽さん……?」
カエルさんが目を覚ますと芽さんは枯れ果てカエルさんの頭から抜け落ちていました。

「芽さぁぁぁ～～～～～～ん!!!!!!」
カエルさんは大声で泣き叫び、芽さんを抱き上げました。

「芽さんどうして?どうして死んじゃうの?芽さん!おいらをひとりぼっちにしないでよ!!芽さんがいないとおいら生きていけないよ!!そうだ…ほら?二人で指切りの約束したの覚えてるでしょ?二人でいろんなところに行って、いっぱいいっぱい思い出を作ろうって約束したでしょ?芽さん!目を覚ましてよ!!うううっ……」

カエルさんは芽さんに訴え続けましたが、カエルさんの声はもう芽さんにはとどきませんでした…。

とても悲しい芽さんとの別れ。

残酷なようですが、これは仕方のないことなのです。厳しい現実なのです。

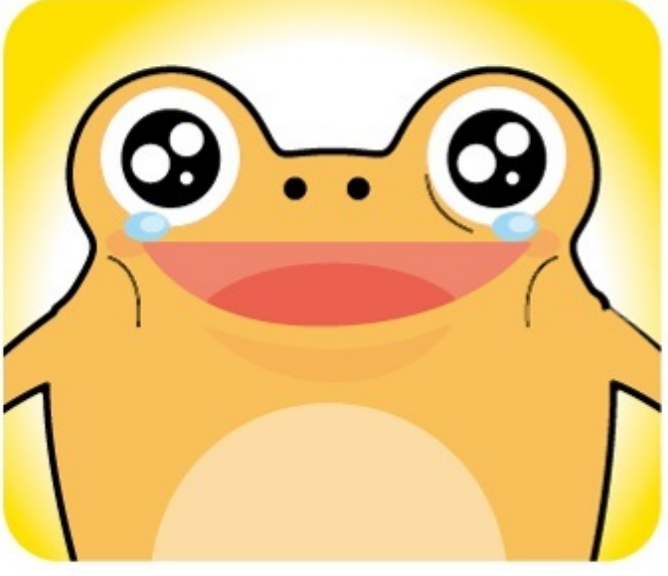
しかし、カエルさんはその現実を受け止めることができませんでした。

何日も何日もずっとずっと芽さんを抱きしめたまま何も食べずに芽さんが元気になるのを待っていました……。

最終話 ずっと一緒

芽さんがいなくなりカエルさんは長い間何も食べていませんでした…。
そのせいでカエルさんはすっかりやせ細り、
もう生きる気力も失っていました。
そんなカエルさんを心配して、近くに住むアマガエルやサンショウウオじいさんなどがカエルさんを励ましにやってきていましたが、カエルさんは元気になることはありませんでした。
怒りしかし、サンショウウオじいさんは何も食べないカエルさんをしかりつけ、無理矢理にでもご飯を食べさせていました。そのおかげでカエルさんはなんとか生き延びていました……。

そして1年が経ち、外はいつものように晴れやかでした。
カエルさんはなんだか久しぶりに外を見たくなりました。
カエルさんがうつろな目で外を見ると、なんとそこには無数の芽さんの花畑が広がっていました。
カエルさんは驚いて涙が溢れ、思わず大声で叫びました。
「芽さんが帰ってきた!!!芽さんがおいらのところに帰ってきた!!!芽さんがおいらのところに……ううっ…。グスッ。」
1年前、芽さんの綿ぼうしから飛んでいった種が開花し、無数に花を咲かせていたのです。



そしてカエルさんはふらふらと外に出ると、芽さんの残した花畑の中に寝っ転がりました。
「芽さん帰ってきてくれたんだね。ありがとうありがとう。おいら信じていたよ…。」
カエルさんはとてもとても嬉しくて芽さんの花畑に何度も何度も

ありがとう。ありがとう。とお礼を言いました。

「芽さん。せっかく会えたのにおいらなんだか眠くなってきたよ。
実を言うといままで芽さんが元気になるのを待っていたからあんまり眠ってないんだ。やっぱりおいらはいつまでたっても寝ぼすけだね。へへっ。」

カエルさんはそう言うとそのまま芽さんの花畑の中で眠ってしまいました。
大好きな大好きな芽さんに再び出会えたことでとても安心したのでしょう。

その後、カエルさんは少しずつ元気を取り戻していきました。
そして、カエルさんは元気を取り戻していくうちに、芽さんからもらったたくさんの大切なものに気が付きはじめたのです。
いままでひとりぼっちだったカエルさんは芽さんに出会うことにより喜びや楽しみそしてときには悲しみ。それにたくさんの友達を作ることができました。
カエルさんは芽さんからもらったいろいろなものを強く実感し、
そして芽さんに深く感謝しました。
カエルさんは空を見上げ心を込めて芽さんに「ありがとう」と言いました。
その後、カエルさんはあのとき芽さんと約束した「開花の日」を毎年かかすことなくみんなで祝いました。
たくさんの友達に囲まれ、そして毎年咲かせる芽さんの花畑に見守られながらずっとずっと平和に、そして幸せに暮らしました。

おしまい。

カエルさんと芽さんのお話

http://p.booklog.jp/book/38294

著者：てつや
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/blogehon/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/38294

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/38294

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.